

関西大学での思い出

伊 藤 誠 宏

退職をむかえて、それにまつわる文章を書く時、大学を去ることを意識するが、平素は、当面の仕事をこなすのが精いっぱいである。退職の実感がない。

大学を去るにあたって、心に浮かぶのは、自由・闊達な大学で人生の大半を過ごせた喜びや、在職中、いろんな分野で活躍された、大学と縁（ゆかり）のある方々の心情や気骨に触れた折の感動などで、感傷的な情感ではない。

関西大学という「場」に集う人々、関西大学という「場」が育んだ人々との「出会い」が、私の場合は、大学の思い出として、より強く心に刻まれているように感ずる。

韓国の教育界で活躍された先輩の言葉、「国籍は変えられても、母校を変えることはできない」に接した時の感動は、いまなお心に強く刻まれている。

この先輩は、関西大学卒業後、第二次世界大戦、朝鮮戦争の戦禍を乗り越え、韓国の教育界をはじめ、いろんな分野で活躍された方と伝え聞く。この方の人生を物語る「国籍は変えられても、母校を変えることはできない」と言う言葉は、わが母校への思いと共に、私にとっては終生忘れえぬ言葉である。

関西大学で、私は師にも恵まれたと思う。とくに、恩師小方厚彦先生と親身になってかわいがっていただいた山方達雄先生との出会いが、私の人生を大きく変えたと言っても過言ではない。小方厚彦先生が、Jacques Chaurand著、*Histoire de la langue française*における *Ordonnance de Villers-Cotterets*の記述をめぐって、Jacques Chaurandと一歩も引かず論陣をはられていた姿に、また、山方達雄先生がGeorge Sand研究者

Georges Lubinに鋭く切り込んで質問しておられた姿に、私は衝撃にも似た感動をうけた。

両先生の学問に対する姿勢や徹底した、妥協を許さぬ研究姿勢を、今後も私の研究生生活の心の糧として生きてゆきたいと思っている。

両先生以外にも、怠惰な私に、おりにふれ暖かく指導・支援・激励をいただいた先生方も多い。諸先生方に深く感謝している。さらに、フランス学専修の先輩・同僚の方々にも大変お世話になった。みなさんに深謝すると共に、フランス学専修のより一層の充実・発展を期待しつつ、筆を置く。